

# 人名及び商品名を表す固有名詞の言語学的特徴 —その可算性・不可算性を巡って—

竹中 裕貴

## 0. はじめに

竹中 (2008) では、商品名を表す名詞を「総称化」という観点から捉え、そのカテゴリー変化のプロセスを記述するとともに、山田 (2005) の提示した Hoover の言語変化を例にさらなる意味発展のプロセスを記述し、商品名を表す名詞が言語学的にも興味深い側面があり、広く現代英語の中に浸透していることを示した。

本稿では、まず、可算名詞及び不可算名詞の一般的特徴を概観し、次に名詞分類の中で簡単に処理されてきた人名を表す固有名詞を文法的に見直し、どのようなメカニズムで共通名詞化して可算名詞として用いられるのかを明らかにしていく。さらに、固有名詞の下位範疇と位置付けられ、上記のような言語的特徴を持つ商品名を表す名詞について、その可算性及び不可算性がどのように具現化されているのか、具体例を示しながら記述していきたい。

## 1. 可算名詞・不可算名詞の特徴

可算名詞と不可算名詞の区別については、これまで、一般的な文法書のみならず、言語学的な名詞の考察の中で様々な提案がなされてきたが、以下の Cruse (2000: 269-270) がうまくその特徴を一般化している。<sup>1</sup>

- (1) Count nouns present something as being manifested in discrete, bounded units that in principle can be counted; mass nouns present their referent as an unbounded mass. Notice that this is a matter of conceptualization, not of objective reality: the blood referred to in *There was blood on the floor* may well have occurred in discreet drops and patches, but it is thought of as an undifferentiated substance.

— Cruse (2000: 269-270)

上記の一般化では、可算名詞については、その指示物が「個別的な境界のある単位」を表すものとしてその特徴が捉えられ、不可算名詞については、「境界のない質量的集合体」を表すものとしてまとめられている。さらに、これらは客観的な事物の有様を直接反映したのではなく、話し手の名詞の提示の仕方の問題であって、「概念化」の問題であるという重要な指摘もなされている。<sup>2</sup>

本稿では、この Cruse (2000) の記述を踏まえ、不可算名詞に関しては、その指示物が実体のある場合と実体のない場合をさらに区別し、可算名詞及び不可算名詞の中核的な意味を以下のようにまとめておきたい。[cf. 池上 (1992-1993)]

(2) 可算名詞：名詞の表す指示物が具体的な実体を持ち、個別化できる対象として把握される名詞

不可算名詞：名詞の表す指示物が実体のある均質的な連続体、あるいは実体のない抽象概念として把握される名詞。

そして、可算名詞・不可算名詞には、(2) で示した中核的意味を反映し、一般的に (3) のような文法的特徴が見出せる。

(3) [可算名詞]

(i) 単数形では必ず不定冠詞やその他の限定詞を伴う：a [this] book [cf. \*book]

(ii) 複数形がある：books

(iii) a few, many や数詞の修飾を受ける：a few/many [three] books [cf. \*much book]  
[不可算名詞]

(i) 単数形で限定詞なしで生じる：water [cf. \*a water]

(ii) 通例複数形では生じない。あるいは複数形では異なる意味となる：waters (「(特定の) 水域、海域」「(困難な) 状況、立場」等の意)<sup>3</sup>

(iii) a little, much の修飾を受ける：a little/much water [cf. \*many waters]

不定冠詞がつく、複数形がある、さらに数詞による修飾を受けるといった可算名詞の文法的特徴の背景には、その指示物が個別化できる複数の同一の（あるいは同一と見なせる程度に類似性のある）個体から成る集合体を形成していることが想定され、「数える」という行為は、その集合の成員を「数える」ことにほかならない。<sup>4</sup> 一方、不可算名詞の場合は、「数える」行為とは馴染まず、その反映として、単数形で不定冠詞や他の限定詞を必ずしも必要としない、通例複数形を持たない、数詞による修飾は受けないといった文法的特徴を示すが、(iii) の原則は量化が可能であることを示している。

他方、可算名詞と不可算名詞を議論する際に常に問題となるのが、ほぼすべての名詞が、それぞれ段階性があるにせよ、可算名詞及び不可算名詞の両方で用いられるという現象が存在することである。この現象については、段階性はあるにせよ、各名詞は、基本的に可算名詞、あるいは不可算名詞のカテゴリーのいずれかに属し、その使用される文脈によって適切なカテゴリーが決定されると考えておきたい。その原理については、Wierzbicka (1987:507) が次のように指摘している。

(4) The fact that many words can be used as either countable or non countable depending on the meaning intended shows that the grammatical characteristics are sensitive to changes in the conceptualization.

このように、各名詞は、その指示する事物の外界世界における様態のあり方やその知覚

的顕著さにより大きく影響されるが、究極的には、「概念化」、すなわち「話し手の物事の把握の仕方」に左右され、さらに言うなら、「各文脈における話し手の名詞の焦点の当て方により、その可算性及び不可算性に関するカテゴリーが決まる」と考えられる。[cf. Reid (1991)]

以下では、やや特殊な例ではあるが、具体的な文脈の中で、可算名詞から不可算名詞にカテゴリー変化を起こしている例を観察しておく。

(5) After I ran over the cat with our car, there was *cat* all over the driveway.

— Langacker (1987)

(5) では、猫が車に引かれ、その死骸がドライブウェイに残っている状況が描写されているが、個性性が失われた“*cat*”は、*there* 構文において不可算名詞扱いされている。次の(4)についても、通例、可算名詞として機能する“*shelf*”や“*table*”が“*food stuff*”として不可算名詞となっているが、物語などにおけるシロアリの台詞としては妥当なものとなる。

(6) I don't like *shelf* — I'd rather eat *table*. — *ibid.*

また、(7)において、ナイフの刃先が削れて変形していく対象となる場合には、可算名詞の“*blade*”は、物質的に把握され、不可算名詞となっている。

(7) When he finished using his knife to tunnel through the stone wall, it had very little *blade* left. — *ibid.*

さらに、次の例においても、(8a) では、車の空間的広がりには焦点が当てられ、「(ロシアの)ラーダ車では値段の割に大きい車である」ことが述べられ、(8b) では、表面的広がりには焦点が当てられ、「(作業や食事等のために)十分なテーブルの広さがない」ことが示されているため、“*car*”及び“*table*”が、それぞれ個体ではなく連続体として捉えられている。

(8) a. With a Lada you get a *lot of car* for your money.

b. Could you move along a bit? I haven't got *much table*. — Cruse (2000)

以上、簡単にではあるが、可算名詞・不可算名詞の一般的特徴を記述し、具体的な文脈の中で、話し手の物事の把握の仕方によってそのカテゴリーが決定されることを簡単に観察した。次節では、人名を表す固有名詞に絞り、こうした名詞のカテゴリー変化の問題について考察していきたい。

### 3. 固有名詞の共通名詞化(可算名詞化)について

人名を表す固有名詞については、特に哲学的な観点からの議論が盛んに行われてきたが、名詞分類の議論の中では、例外的に取り扱われることが多く、あまり詳しい分析はなされてきていないように思われる。<sup>5</sup>

固有名詞は、定義上、固有の個別的な事物を指示するのに用いられる名詞であり、その「固有性」が大文字で記号化されることに特色がある。<sup>6</sup>従って、固有名詞は、通例、使用されている文脈の中で唯一的な指示物を表す限り、数える必要がないのである。しかしながら、この唯一性の条件が、事物の外界世界における有様として、あるいは、本稿で重視する「話し手の事物の把握の仕方」によってキャンセルされると、大文字が保持されることはあっても、もはや共通名詞と文法的には区別する必要がなく、不定冠詞との共起、複数語尾の付与、さらに数詞による修飾といった文法的特徴を示すことになり、可算名詞としてカテゴリー化されることとなる。以下、どのような場合に、人名を表す固有名詞が可算名詞化するかということについて、まとめておきたい。

まず、(9)のように、定冠詞を伴って、姓を表す固有名詞が複数形で用いられる用法がある。

(9) He glanced tensely at his watch. “*The Dawsons* don’t live too far from here. In Glenburnie.” “*The Dawsons?*” I peeled off my gloves. “Her parents. I’ve got to talk to them.” — P. Cornwell, *Cruel & Unusual*

この場合は、その姓を持つ人物が複数存在し、the を付して具体的に指示するという言語形式をとり、文脈により、「～一家、～夫妻、～兄弟、～姉妹」等の意を表す。同一の名前の人物が複数存在すれば、文法的には数詞による修飾も問題なく行うことができ、(10)のような例が見受けられる。

(10) I leaned back and got the phone from my desk and called information in Rochester, New York. There were *twenty-two Colbys* listed.

— P. Parker, *Walking Shadow*

単にある姓を持つ家族の一員であることを表すには、背後に同一の姓を持つ家族の他の成員が示唆され、(10)のように不定冠詞を伴って用いられる。

(11) “I’m his brother-in-law, Eugene Nickerson.” “You must be married to his sister then,” I said. He laughed. “No, he’s married to my sister. She was a *Nickerson* before she became a *Daggett*.” — S. Grafton, *D’Is For Deadbeat*

同様に、ある名前を持つ不特定な一人の人物に言及する場合には、不定冠詞を伴うことになり、以下のように、“a (n) + first name” [→ (12a)]、 “a (n) + title + family name” [→

(12b)], “a (n) + first name + family name” [ → (12c)], “a (n) + title + family name + first name” [→ (12d)] などの形式が可能である。

- (12) a. There’s *an Alex* asking to see you. — *MED*  
b. *A Mrs. Barnett* is waiting for you. — *LAAE*  
c. “Oh, hi, I’m trying to reach *a John Daggett*, who used to live in this area.”  
— S. Grafton, *D’Is For Deadbeat*  
d. “I’m looking for *a Mr. Jack Germaine*. I believe he’s a guest.”  
— S. Martin, *The List*

この用法では、固有名詞によって人物の特定化を図っているというよりは、人名表現そのものに焦点が当てられていることに注意したい。次の例では、“Melissa’s teacher”として、人物が特定化されているにもかかわらず、聞き手には馴染みのない人物として後続する文脈で再び不定冠詞を伴う形式で人名を導入し、その説明が加えられている。

- (13) Presenting myself as her doctor and not clarifying when the clerk assumed pediatrician, I asked to speak with Melissa’s teacher — *a Mrs. Vera Adler*, who confirmed that Melissa had missed a good deal of school early on the semester but since then her attendance had been perfect and her “social life” seemed better. — J. Kellerman, *Private Eyes*

さらに、(14) では、“Betsy” が具体的にある特定人物を指示する場合には無冠詞で用いられているが、“a Betsy” では、“Betsy” という呼称が“Elizabeth” のくだけた言い方として、それによって象徴される性格を関連づけ、“Betsy” と “a Betsy” が巧みに使い分けられていることに注意したい。

- (14) When *Betsy* was certain Darius was gone, she gave the check a big kiss, gave a sudden whoop and whirled around. *A Betsy* was allowed to indulge in immature behavior from time to time. — P. Morgan, *Gone, But Not Forgotten*

人物のある一時的な精神状態や身体状況について言及する場合、どのような側面に焦点を当てているのかについては、形容詞で明示されることがあり、(15) のような表現が可能である。

- (15) a. “I hope it won’t be another 50 years before we can celebrate like this again,” joked *a high-spirited Bing Crosby*. — Bache & Davidsen-Nielsen (1997)  
b. It was *a young Peter Simpson* that I saw in the picture. — *ibid.*

この場合は、人物の一時的な精神状態や身体的特徴などにより、一人の人物に多面性を認め、それぞれの側面で種別化が行われていると考えられる。これに対して、人物名に形容詞がつく場合でも、“poor John” のような場合には、不定冠詞は伴わないことに注意したい。形容詞は非制限的な修飾語として機能し、John に対する話し手の感情の表出にすぎないからである。<sup>7</sup> 後者は、次の例のように、呼びかけ表現として使用することも多い。

(16) “See you tomorrow.” “Sleep well, *beautiful Electra*. See you tomorrow.”

— L. Fleischer, *Hearts and Diamonds*

上記の (16) の用法では、同一人物についての多面性を問題にしているが、異なる人物間で、その外面的あるいは内面的な類似性に着目し、特定の名称で言及することがある。この用法で用いられる人物名は、通例、歴史上の有名人物に限られ、以下のように形容詞を伴う場合と伴わない場合がある。<sup>8</sup>

(17) a. Already he is being hailed as a *young Albert Einstein*. — *MED*

b. He’s like a *modern Dickens*. — *LAAE*

c. She may look good on the cinema screen but she’ll never be a *Greta Garbo*.

— *CIDE*

d. They say the young actress is a (*new*) *Marilyn Monroe!* — *LDELC*

歴史上の有名人の名前が可算名詞化される場合には、まったく異なった言語のメカニズムが作用することがある。いわゆるメトニミー (metonymy) の原理が働き、人物名で、例えばその人の作品などを指し示すことが可能である。

(18) a. The gallery has recently acquired a *Picasso*. — *MED*

b. Is it a *Monet?* — *LAAE*

c. This painting is a *Rembrandt*. — *LDELC*

以上、記述的に述べてきた固有名詞の可算名詞化の現象を、図式にまとめなおすと、以下のようになる。

(19) (i) <唯一的人物> → <複数化> → <(同一名の複数)物>

固有名詞

可算名詞

(ii) <唯一的人物> → <種別化> → <一時的な精神状態・身体状況を持つ人物>

固有名詞

可算名詞

(iii) <唯一的人物> → <類似化> → <(歴史的有名人物と)類似性を持つ人物>

固有名詞

可算名詞

- (iv) <唯一的人物>→<作品化>→<(歴史的有名人物の) 作品>  
固有名詞 可算名詞

#### 4. 商品名を表す名詞の可算性と不可算性について

商品名を表す名詞について考える場合には、商標 (Brand Name) そのものから出発する必要がある。商標そのものは、言語学的には、一つの抽象的概念を表すものとして捉えることができる。つまり、その商標が具体的な商品に適用された時点で、商標がその指示する事物と一体化し、その用いられる具体的な文脈の中で、どのようにその指示物が把握されるのかによって、可算名詞、あるいは不可算名詞として機能していくことになる。商標から具体的な可算名詞・不可算名詞への転換プロセスを改めて図式化すると、以下のようになる。

(20) [第一段階]

<商標>→<実体化>→<製品>

[第二段階]

<製品>→<個別化>→個体 (の集合)

[可算名詞化]

<製品>→<連続化>→連続体的な物質

[不可算名詞化]

そして、それぞれの商品名を表す名詞が、具体的な文脈の中で、可算名詞から不可算名詞、あるいは不可算名詞から可算名詞へとさらにカテゴリー変化を起こしていくことになる。その際、竹中 (2008) で詳述したように、「総称化」という意味変化も伴い、大文字が小文字化されるという語形変化を生じる場合もある。

以下、典型的な例を基に、商品名を表す名詞が、実際の文脈の中でどのように用いられているかを見ていきたい。

まず、上記に示した第一段階である商標そのものに焦点が当てられる場合には、その名詞は抽象概念的に捉えられ、可算名詞・不可算名詞の区別としては、不可算名詞となり、以下の例でも、ビールの銘柄のみを示す場合には無冠詞で用いられる。

- (21) “A drink?” Hunt said. “Coffee?” “Beer is nice,” I said. “I have *San Adams*,” he said. “*White Buffalo, Red Hook Ale, Saranac Black and Tan.*” “*White Buffalo* would be nice,” I said as if it made a difference. — R. Parker, *Small Vices*

実際の使用では、小説などにおいては読者の商品名に対する知識にも配慮が行われ、まず商品名を表す語を限定形容詞的に用い、後続する普通名詞でその実体を明らかにしてから、さらに発展形が用いられていくことが多い。(22) では、“*Dos Equis*” がビールの名前

であることを先行文脈で明らかにされ、その後の文脈では、そのビールが容器と一体化し、可算名詞として用いられている。

- (22) Hawk drank some *Dos Equis* beer. … The waitress brought us our food. Hawk ordered *another Dos Equis*. — R. Parker, *Valediction*

読者にも馴染みのあるものについては、比較的自由に、不定冠詞、さらに、複数形や数詞を伴う表現で用いられる。代表的なものとして以下に Coke (Coca-Cola) の例を挙げておく。

- (23) The waitress hurried back. Put a white mug of decaf in front of me, and a *Diet Coke* in front of Marcy. — R. Parker, *Small Vices*

- (24) Students walked past us with books, and book bags, and knapsacks, and *Diet Cokes* in paper cups with plastic tops and straws sticking out. — R. Parker, *Small Vices*

- (25) “You care for a *Coca-Cola*?” he said. “Sure.” “Vennie,” he raised his voice. “*Couple Coca-Colas*.” We waited while a young black woman with bright blood hair sashayed in, chewing gum, and plopped *two Cokes* on his desk. — R. Parker, *Hugger Mugger* [“Couple Coca-Cola” は、“A couple of Coca-Colas” のくだけた表現。]

上記のように、容器と一体化して可算名詞で用いられることが多いが、飲料そのものに焦点が当てられる場合には、“coffee” や “tea” と同様に、当然、不可算名詞として用いられる。

- (26) She went to the refrigerator, took out *two Cokes*, and handed me one. … We each drank *some Coke*. — R. Parker, *Hugger Mugger*

さらに、次の例では、会話の中で、それぞれの話し手の焦点の当て方によって、可算名詞・不可算名詞が使い分けられていることに注意されたい。

- (27) “Uh, coffee? Or a *Pepsi*? Or a sandwich, if you like. I —” “*Pepsi*,” she said to the woman behind the counter. — W. Harrington, *Columbo: The Game Show Killer*

比較的よく用いられるタバコについては、“a + タバコの商標名” で、“a cigarette” の意が表される。

- (28) a. Leong was smoking a *Lucky Strike*. No filter. The burning tobacco smelled good, although I knew it wasn’t. — R. Parker, *Walking Shadow*  
b. Knocking out a *Marlboro*, he clamped it between his lips. — P. Cornwell, *The Body Farm*



- c. He slid a pack of *Marlboros* out of his shirt pocket. — P. Cornwell, *From Postern's Field*

車についても、商標名によってその車種が表されることが多く、形容詞を伴って色などの詳しい描写が行われる。なお、“Mercedes”については、(28)の例に見られるように、車名の一部である語尾の -s の影響を受け、複数形が単数形と同形となることに注意したい。

- (29) a. I went up the driveway and pulled onto the parking pad to the left of the house, where a *dark maroon BMW* and a *silver Mercedes* were parked. — S. Grafton, *C'Is For Corpse*  
b. “You got threatened by a guy who drives a *Range Rover*?” — R. Parker, *Sudden Mischief*

- (30) *Four Mercedes* were parked in the courtyard like a glossy ad campaign, and a fountain in the center shot a stream of water fifteen feet high. — S. Grafton, *C'Is For Corpse*

衣服などが商標で表される場合には、具体的にどのような衣服を指示しているのかについては、文脈に委ねられ、(31)において、“a Ralf Lauren”は、「ボタンダウンのシャツ」について言及している。

- (31) Finally a tall black man took off his button-down and gave it to Lisa. “I want it back, it's a *Ralf Lauren*,” he said. — K. Follett, *The Third Twin*

他方、不可算名詞として用いられる商品名の例も若干挙げてみたい。(32)では、口臭予防スプレーの“Binaca”は、不可算名詞として量を表す a little によって修飾されており、(33)の“Scotch tape”は、独自の修飾語を伴い量化されている。

- (32) The young guys that worked with them were in men's room checking the haircut, washing up, straightening ties, spraying a *little Binaca*. — R. Parker, *Walking Shadow*  
(33) He cut through many layers of *Scotch tape* and removed the top. — P. Cornwell, *The Body Farm*

(34)の“Super Glue”（強力瞬間接着剤）については、容器と一体化して“a Super Glue”の表現も考えられるが（後続文における a tube にも注意）、通例、不可算名詞として用いられ Super Glue → Superglue → superglue の過程を経て、動詞用法も発展させている。

- (34) “Have you got *Super Glue*?” I asked Dr. Jenrette. “Sure.” He brought me a tube. — P. Cornwell, *The Body Farm*

このような、商品名の可算・不可算の分析は、実際のところどのように扱われているのだろうか。辞書において比較的多くの商品名を載録し、その言語的特徴として可算性・不可算性を付している *LEJD* において確認すると、以下のようにデータをまとめることができる。

商品名の総数	可算	不可算	両方	記述なし
156	67	50	4	37

辞書的記述としては、基本的に (20) の「第二段階」としての可算性・不可算性がそれぞれの語彙項目に記載されていた。すなわち、実際に市場に見られる商品の有様が大きく影響を与える形で、その可算性・不可算性が判断されているようである。事実、(35) のように、個別化できる “Dumpster” や “iPod” の人気商品の一つである “iPod Shuffle” なども、可算名詞として用いられている例が見つかる。

- (35) a. Mario parked, headlights boring into a *brown Dumpster* cancerous with blistered paint and rust, beads of water running down its sides. — P. Cornwell, *Cruel & Unusual*

b.



(<http://www.gocomics.com/boundandgagged/>)

また不可算とされているものは、例えば、“Astro Turf” (人工芝) や、“Bakelite” (合成樹脂) など、連続体として把握され、不可算名詞としての特徴を持つものが該当している。

さらに、数は少なく、特殊ではあるが、可算・不可算両方の記述が見られたものもあった。この中の一つは、上記でも取り上げた、“Coke” (または “CocaCola”) があり、話者がその商品をどのように捉えているかによって変化することを明らかにした商品名である。ただ、可算・不可算の解釈が変化する可能性は、これまでに見てきたように、どの商品名にも存在している。しかし、仮にそのような用法が確認できた場合でも、その殆どが臨時的な用法であるため、通常、辞書には記載されない。ただし、今回の事例では、“Coke” や下記

の“Kleenex”など、すでに「総称化」のプロセスを経たものばかりであり (cf. Clankie 2002)、このことは、それぞれの商品名の可算名詞、または不可算名詞としての用法が広く英語の中に浸透していることを示している。

- (36) a. You won't need nearly as *many Kleenex* as you did for Love Story and yes, you women can wear last winter's midis and high-button shoes and feel right at home.

(<http://sportsillustrated.cnn.com/vault/article/magazine/MAG1084990/index.htm>)

- b. Lou, inside the courtroom, Michael Jackson dabbed his eyes with *Kleenex* when listening to the jurors' decisions count by count of not guilty.

(<http://transcripts.cnn.com/TRANSCRIPTS/0506/13/bn.06.html>)

したがって、*LEJD*においても、可算名詞でもあり、不可算名詞でもあることが示されていると考えられる。

また、団体、組織名などについては、どれも可算性・不可算性についての記述がみられなかったが、これらの項目は、一般的な固有名詞がそうであるように、その唯一性が保持され、可算性・不可算性は問題とならないのである。

以上、一般に固有名詞の下位区分とされる商品名を表す名詞について、その可算性・不可算性の観点から、実際の使用面に重点をおき記述し、共通名詞に適用される言語学的メカニズムが、商品名をあらわす名詞についても機能し、具体的な文脈の中で、可算名詞・不可算名詞として、その文法的特徴を示しながら用いられていることを実証した。

## 5. おわりに

本稿の議論により、固有名詞及びその下位区分としての商品名を表す名詞は、その意味から特殊なものであると片付けられてしまいがちであるが、文法的な分析を深めていくと、一般的な共通名詞と比較し、決して例外的なものではなく、英語を構成する要素として十分その機能を備え、具体的文脈の中で広く使用されていることが明らかになった。また、言語の一般的なメカニズムの検証についても、こうした一見例外的なものについて適用することで、そのメカニズムがどのように働くのかがより明確に見えてくると考えられる。

本稿を通して、商品名を表す名詞は、これまでの多くの議論で明らかにしてきたように、広く英語が使用される言語文化の理解に欠かせない存在であるとともに、英語の言語学的分析においても貴重な存在であることを改めて論じた。

## 注

<sup>1</sup> 可算名詞及び不可算名詞についてのこれまでの存在論的見解、意味論的見解、文脈的(機能的)見解等については、主として Gathercole (1986) を参照されたい。

<sup>2</sup> このような認知的な基盤に立った可算名詞・不可算名詞の区別は、主として Langacker

(1987, 1991)による。また、池上(1992-1993)は、日本語を広く論じる中で「数」の問題を取り上げ、認知的言語学的な立場から可算名詞・不可算名詞の区別についての本質的な議論を行っている。

- 3 複数語尾については、必ずしも可算性を保証する文法的特徴とはならないことに注意したい。Weirzbicka (1985) が詳しく論じているように、「絶対複数語 (pluralia tantum words)」と呼ばれるものが存在し、形態的には複数形を取るが、一般に不可算名詞として扱われる名詞群がある：oats, hundreds-and-thousands, chives, dregs, coffee-grounds, curds, soapsuds, grouts, grits/ guts, brains, bowels, hemorrhoids; stairs, bleachers, ruins, catacombs/leftovers, groceries, contents, remains, refreshments, goods, goodies, spoils, supplies, etc.
- 4 「数える」という行為について、Reid (1991:73) は次のように端的にまとめている：The principle is clear: in order for counting to take place, objects must be sufficiently similar as to be regarded as instances of the same thing, yet dissimilar and discrete enough to permit enumeration. If they are too similar (e.g., individual grains of rice), or too dissimilar (e.g. a table and a chair) they cease to be a plurality. この記述から、何故、集合名詞の中で、異種混合体として把握される「家具」や「装置」などについて、\*many furnitures [equipments] 等が言えないのかも明らかである。
- 5 哲学的な議論のまとめとしては、Akmajian, *et al.* (1995:243-245) が参考となる。Reference Theory、Description Theory、さらにNominal Description Theoryについてうまくまとめられている。
- 6 以下の辞書の定義はこうしたことをうまく反映している：proper noun<a noun that names a *particular* (筆者イタリック) person, place, or thing that begins with a capital letter [MED]
- 7 次のように、定冠詞及びその他の限定的な修飾語を伴う表現にも注意：“Carry, you are honestly still *the same sweet Caroline Anderson* who walked into our dorm room in September.” — L. Fleischer, *Hearts and Diamonds*
- 8 “do+固有名詞”で「～のまねをする」の意では不定冠詞を伴わないことに注意：The voice on the phone said, “Spencer, do you expect to deceive anyone with that nonsense?” I said, “You want to hear me do *Richard Nixon*?” — R. Parker, *A Savage Place*

## 参考文献

<辞書>

*Cambridge International Dictionary of English 1995*. Cambridge University Press. [CIDE]  
*Longman Advanced American English*. 2007 London: Longman [LAAE]  
*Longman English-Japanese Dictionary*. Harlow, Essex: Pearson Education. 2006. [LEJD]  
*Longman Dictionary of English Language and Culture*. 1998. London: Longman. [LDEL]  
*Macmillan English Dictionary*. 2002. Oxford: Macmillan. [MED]

<研究書・論文>

- Akmajian, *et al.* 1995. *Linguistics : An Introduction to Language and Communication*. (Fourth Edition) Cambridge, Mass. : The MIT Press
- Bache, C. & Niels Davidsen-Nielsen. 1997. *Mastering English : An Advanced Grammar for Non-Native and Native Speakers*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Clankie, Shawn M. 2002. *A Theory of Genericization on Brand Name Change*. Studies on Onomastics, vol.6. Ceredigion, Wales : the Edwin Mellen Press.
- Cruse, A. 2000. *Meaning in Language : An Introduction to Semantics and Pragmatics*. London : Blackwell.
- Gathercole, Virginia C. 1986. *Evaluating Competing Linguistic Theories with Child Language Data: The Case of the Mass-Count Distinction*. Linguistics and Philosophy, vol. 9. pp. 151-190.
- Langacker, R.W. 1987. "Nouns and verbs," *Lg.* 63, 53-94.
- . 1991. *Concept, Image, and Symbol : The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin & New York : Mouton de Gruyter.
- Reid, Wallis. 1991. *Verb & Noun Number in English*. London and New York: Longoman.
- Wierzbicka, A. 1988. *The Semantics of Grammar*. Amsterdam & Philadelphia : John Benjamins.

池上嘉彦. 1992-1993. 「日本語と日本語論－その実像と虚像」(1)－(12). 『言語』東京 : 大修館書店.

竹中裕貴. 2008. 「英語商品名の言語学的研究－Genericization における段階制の考察－」 『島根大学外国語教育センタージャーナル』第4号、pp.64-74.

山田政美. 2005. 「商品名を侮ると大怪我をする」『英語教育』54巻、第9号、pp.28-29.

<インターネット資料>

*Bound & Gagged* <http://www.gocomics.com/boundandgagged/>

*CNN.com* <http://sportsillustrated.cnn.com/vault/article/magazine/MAG1084990/index.htm>

<http://transcripts.cnn.com/TRANSCRIPTS/0506/13/bn.06.html>